

肢体不自由のある児童生徒に対する NIE の取り組み

Newspaper in Education for Physically Challenged

大塚 恵

目 次

I. 問題と目的	80
II. 肢体不自由教育における NIE 導入の意義と環境設定	80
III. 特別支援学校（肢体不自由）における NIE の実践	82
IV. まとめ	84

I. 問題と目的

筆者は、2009年度より当校施設併設学級でNIE (Newspaper in Education の略称。「エヌ・アイ・イー」と読む。)に取り組んでいる。NIEは学校などで新聞を教材として活用する活動である。

NIEの学校教育への導入は、1989年9月に社団法人日本新聞協会(以下、新聞協会とする。)が「NIE実践校制度」を設立し、パイロット計画として学校に新聞を提供する事業を開始したことが発端である。開始当時は、東京都内の小学校1校、中学校2校がNIE実践校として指定された。

学校に新聞を提供する事業は、1998年3月に新聞協会から社団法人日本新聞教育文化財団(以下、新聞財団とする。)に引き継がれた。その後、2011年3月に新聞協会が新聞財団を吸収合併して、事業を継続し現在に至っている。新聞協会(2011)の発表によると、2011年度のNIE実践指定校は、全国の小学校、中学校、高等学校をあわせて542校となっている。(実践指定校は、全国の小学校、中学校、高等学校のうち、各都道府県のNIE推進協議会がNIEの導入、推進に積極的な学校を推薦し、その中から審議されて認定される仕組みになっている。)

学校に新聞を提供する事業の開始から20年余りが経過し、新聞を活用した授業は全国的に展開されており、通常学校ではNIEという名称も浸透しつつある。

通常学校でNIEが広がる背景のひとつには、小学校、中学校学習指導要領(2008年3月告示)との関連がある。改訂された学習指導要領の総則には、教育課程編成の一般方針の冒頭に、「教育基本法及び学校教育法その他の法令」に従うことが明記されるとともに、生きる力をはぐくむことを目指し、①基礎的・基本的な知識及び技能を確実に習得させ、②これらを活用して課題を解決するために必要な思考力、判断力、表現力その他の能力をはぐくみ、③主体的に学習に取り組む態度を養うことが示されている。

また、小学校、中学校の学習指導要領解説書には、国語科や社会科を中心に各教科等の中で取り扱う教材のひとつに「新聞」が明記されている。

通常学校の中で、NIEを各教科の授業で活用し成果をあげた事例は数多く報告されており(例えば、徳田[2006]、東京都北区立王子第三小学校[2009])、学習指導要領の動向や活字離れの危機感という教育的な課題もあり、新聞を活用した取り組みは今後ますます注目されると考えられる。

一方で、先述したNIE実践指定校全国542校のうち、特別支援学校の実践指定校は5校と全体の1%に満たず、実践報告も少ない(例えば加藤[2010]など)。5校の内訳は、特別支援学校(聴覚障害)が2校、特別支援学校(知的障害)が2校で、特別支援学校(肢体不自由)は当校のみである。

以上のデータからも分かるように、新聞を教材として活用する取り組みは、現在は通常学校が主体となっているが、筆者は特別支援学校(肢体不自由)においても、NIEの導入は障害ゆえの経験不足を補い、学習指導要領に標榜したねらいを目指すためにも良い成果をあげるのではないかと考えている。特別支援学校(肢体不自由)では、児童生徒の障害が重度・重複化、多様化しているが、実態に即して配慮と工夫をしながら、通常学校にはみられない特別支援学校(肢体不自由)の特色を生かしたNIEの指導方法を開発できるのではないかと仮説を抱いている。

そこで本研究では、授業実践などを通して特別支援学校(肢体不自由)におけるNIEの有用性を明らかにすることを目的とした。

なお、当校には主に家庭から通学する児童生徒を対象とした「本校」と、隣接した心身障害児総合医療療育センター(以下、「療育センター」とする。)に入園している児童生徒を対象とする「施設併設学級」の2つのキャンパスがある。本研究では、施設併設学級に在籍する児童生徒のうち、教科学習、もしくは領域・教科を合わせた指導形態で学習に取り組む児童生徒を対象とした。

II. 肢体不自由教育におけるNIE導入の意義と環境設定

(1) NIE導入の意義

NIEの導入にあたって、最初に「肢体不自由のある児童生徒に対して、NIEを活用する意義」について次のように整理した(図1)。

図1の①、②はそれぞれ、学習指導要領総則と当校の教育目標を抜粋したものである。「基礎的・基本的な知識及び技能」「思考力、判断力」「積極的な社会参加」など、筆者がNIEと関連すると考えられるキーワードを太字にして示した。

③は各教科の目標である。ここでは、中学校社会科の目標を抜粋して示した。

④は施設併設学級の児童生徒の実態である。施設併設学級の児童生徒は、全員が隣接する療育センターに入園している。入園目的は、手術や訓練、社会的な養護性によるものと様々である。個々によっても異なるが、医療的なケアや生活行動面での介助が必要な児童生徒は、学校と療育センターの中だけで1日を過ごすことが多いために、とりわけ長期にわたる在園者はどうしても社会的な体験が不足し、社会的な事象に対する関心が狭まりやすい。

これらの①～④を踏まえて、各教科の目標や内容を押さえた上で、授業の中にNIEを取り入れることで、肢体不自由のある児童生徒の学びを成立させることができ、より児童生徒の力を引き出すことがしやすくなると考えた。

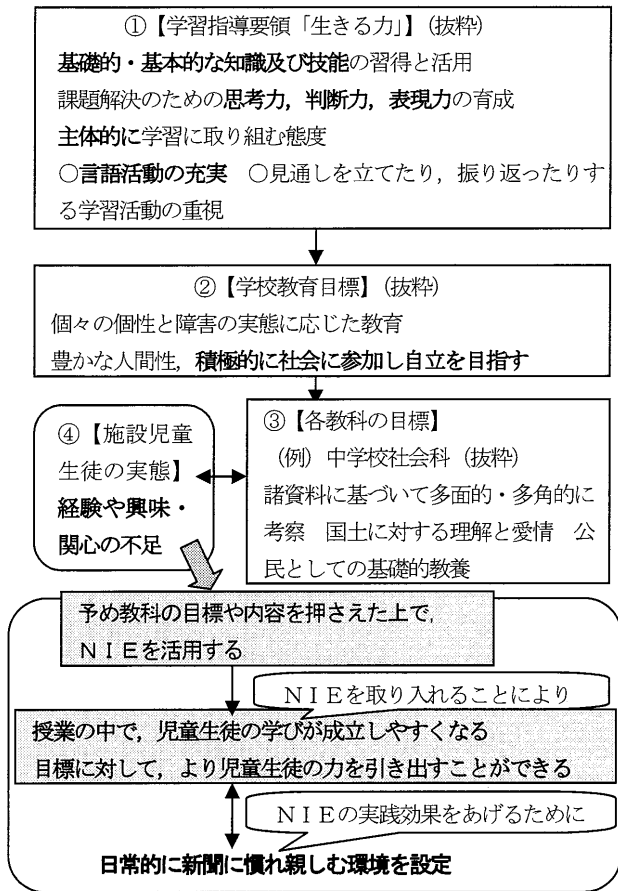


図1 NIEを活用する意義

教科の中にNIEを導入する場合には、予め教科の目標や内容を押さえることが前提である。教科学習におけるNIEの取り組みについては、Ⅲで述べたい。

さらに、授業時間が1コマ40分と他校に比べて短い施設併設学級で、NIEの活用効果を高めるためには、日常生活の中で、気軽に新聞に触れて写真に注目したり、新聞記事を読んだりすることができるような環境が必要と考えた。

そこでまず、新聞に慣れ親しむ環境を整えることに着手した。

(2) 学校における環境設定

療育センターに入園している児童生徒の大半は、新聞を読む習慣がなく、新聞の存在を身近には捉えていない様子であった。生活の様子を観察していると、外部からの情報を収集する方法は、テレビもしくはインターネットからであることが多い。

そこで、児童生徒が日常的に、学校の中で新聞を自由に目にする機会を作ることにした。学校では2009年に、担任の協力を得て小学部と中高等部の教科を中心に学習を行う学級の各教室に「NIEコーナー」を設置した(写真1)。

手術や治療の過程で足を固定されたまま登校する児童生徒の中には、授業中に痛みを訴えることもある。心身



写真1 教科学習中心の学級に設置したNIEコーナー(2010年, 1月)。2紙の新聞を自由に閲覧できるスペースを設定した。

のケアが必要な児童生徒に対しては、気分転換も兼ねて休み時間を利用して自由に新聞を閲覧できるようにした。「NIEコーナー」を設置した後は、興味のある新聞記事を手にとって眺めたり、ページを交換したりして熱心に記事を熟読する児童生徒の姿がみられた。

今年度は担任2名の協力を得て、小学部の教科を中心に行う学級の「朝の会」で4月より毎朝、「ニュース紹介コーナー」を設定した。

筆者が毎朝、新聞記事と解説文を添えてA3用紙2枚に再編集したニュースを、学級担任を通じて日直に渡し、日直が学級の児童全員の前でニュースを読む(写真2)。内容は在籍している児童の様子を考慮し、児童が興味を持ちやすいものに焦点をあてている。

以下は、1学期に紹介した新聞記事の例である。

- ・東日本大震災の被災地に関するニュース (主に小学生の動向)
- ・小笠原諸島、平泉が世界遺産に選ばれたニュース
- ・電力不足と節電対策に関するニュース
- ・春夏の動植物に関するニュース
- ・なでしこJAPAN優勝のニュース



写真2 新聞記事を紹介する日直の児童。新聞記事を紹介する日直の話に、一列に並んだ他の児童が耳を傾けている。(2011年, 6月)

難解な語句の読み方、意味については、高学年の児童が低学年の児童に教えてあげる。「学年が混合している

学級の良さを生かして、ニュース紹介の時間は互いのコミュニケーションを図るいい機会と捉えて、助け合いを大事にしたい。」と学級担任とも話している。

これまで新聞を読んだことがなかった低学年の児童も、高学年が読む新聞記事の内容を聞き、集中している。「ぼくが今日、紹介するニュースは、どんな記事なの？」と予め聞きに来る児童もあらわれた。

この学級は手術や訓練のため短期間在籍している児童が中心であり、治療が終了すると児童は前籍校へ戻る。学年や地域、使用している教科書も様々であり、学習の進捗にもばらつきがみられる学級ではあるが、新聞の活用は学級の多様性にも対応できる良さがあるのではないかと考えられる。前籍校に戻っても児童が引き続き、新聞に関心を持ち、新聞を読んでいってくれるように期待している。今後は担任の先生と相談しながら、国語や社会などの授業の中で、新聞を無理なく有効に活用していくことができる方法を考えていきたい。

また、領域・教科を合わせた指導形態で学習している生徒に対しては、実態に応じて、「朝の会」や「個別学習」などの時間を利用して、無理のないように新聞を活用していく必要がある。例えば、難解な記事の内容を扱うのではなく、新聞記事のカラフルな写真やイラストに着目させて、教員が質問や説明をすることによって、本人から興味や関心を引き出す方法がある(写真3)。

「新聞は役に立つから。」と無理に押しつけるのではなく、楽しく自然に新聞に触れられるような環境設定に努めていきたい。

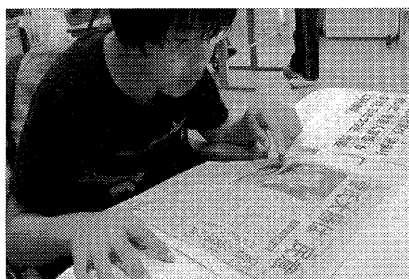


写真3 新聞記事の写真に着目する生徒(2010年9月)。

(3) 関係機関との連携

長期間在園している児童生徒にとっては、療育センターは生活の大半を過ごす空間であり、家庭代わりと呼べるような存在である。

そこで、児童生徒が在園する療育センターとも連携を行うことで、NIEの相乗的な効果が期待できると考えて、療育センターの指導科と長期入園児童生徒の病棟に協力を依頼して、新聞記事を再編集した壁新聞の掲示コーナー「今日のできごと」を設置した。毎日の新聞から、児童生徒が興味を持ちそうな写真やイラスト入りの記事を選定して切り抜き、簡単な解説文を添えてA3用紙2枚

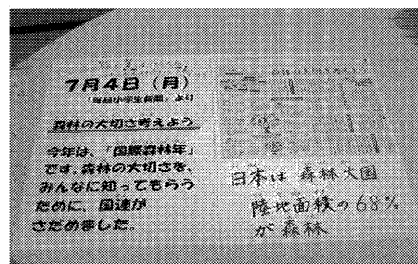


写真4 療育センターに掲示している再編集した壁新聞の例

に貼り、掲示を行っている(写真4)。

療育センター側の配慮で、掲示をする場所は人通りが多いナースステーション前の壁を使用している。

平日の5日間、1日1回、壁新聞を更新するようにした結果、現在は多くの入園児童生徒が壁新聞を見るようになり、掲示の手伝いをしてくれる児童生徒や「今日のニュースは何？」と声をかけてくれる児童生徒が目立つようになった。一文字ずつ指し示して解説文の見出しを読む児童生徒、「どうして、この写真の人は喜んでいるの？」と記事に掲載された人物の心情について、尋ねる児童生徒の様子もみられた。壁新聞を読み、「続きを読みたいから、実際の新聞記事をちょうだい。」と頼まれる場合もあった。

解説文は、内容を正確に伝えるように留意しながら、新聞記事の文言を分かりやすく言い換える場合もある。記事の選定は、最初の半年間は社会との接点を意識して、社会的に大きなニュースを掲示していたが、児童生徒の関心を引くために、写真やイラストが明確に記載されている記事を選ぶようにした。

Ⅲ. 特別支援学校(肢体不自由)におけるNIEの実践

この章では、中学部社会科の公民的分野で、目標と内容にそって新聞を活用した実践を紹介する。

(1) 対象生徒

施設併設学級中学部第3学年生徒1名Aさん(以下、Aとする)。手術の為に、都内の特別支援学校(肢体不自由)より転入し、2011年の1月中旬～5月中旬まで約4ヶ月間、施設併設学級に在籍した。

(2) 社会科における取り組み

次の単元において、NIEを活用した。

【単元】

中学校第3学年

公民的分野「社会の変化と私たちの生活」

【目標】

- ①高度経済成長期から以後の社会的な変化に対して、興味と関心を持ち、適切な課題を設定し意欲的に追究す

る。

- ②現代社会に関する様々な資料やグラフを読み取り、必要な情報を選択する。
- ③公害問題や環境問題、少子高齢化社会などの社会的な変化に対する問題について、多角的・多面的に考察する。
- ④現代日本の発展の過程について理解するとともに、現代社会の特色に気づき、その知識を身につける。

【単元におけるAの実態】

- ・テレビのニュースをよく見て、授業と関連づけて話題にするなど、社会的事象に対しては比較的関心が高い。
- ・一方で、話題にあがった内容について断片的な知識はあっても、それについての根拠や自分の意見を問われるとなかなか説明できない面がある。

【学級の特質】

少人数の学級なので、同級生と意見交換しながら、自分とは違う多様な考えに気づき、自分の意見を深めるという機会が、なかなか持ちにくい。

【授業時数】計12時間

【学習計画】①これまでに学習した内容（産業構造の変化、公害問題と環境問題、人口問題、核家族化、少子高齢社会、情報化社会など）から、適切な課題を設定する。

②課題に沿って、新聞、図書資料、インターネットなどの資料から、必要な情報を収集する。

③調べた情報に基づいて、読み取ったデータから明らかになった事実や疑問点、自分の意見、今後調べたいことをまとめる。

④まとめたことについて、分かりやすく発表をする。

【NIEを活用した学習】

②の「課題を設定して、資料から必要な情報を収集する」学習、③の「読み取ったデータから、事実や意見をまとめる」学習にそれぞれ新聞を教材として活用した。

(3) 指導の経過と結果

Aが在籍していた期間に東日本大震災が起り、福島県の原子力発電所の事故や電力の不足、首都圏の計画停電に関するニュースが話題となった。

Aは教科書で学習した環境問題に基づき、「日本は今、電力が不足しているといわれて、大変なことになっているけれど、どうしたら、必要な電力を確保できるのか？」と考えて調べたいテーマを設定した。

新聞を中心に資料を入手し、原子力発電所の仕組みや、日本が依存しているエネルギーの割合などを調べた。最初は東日本大震災を扱ったニュースの量が多過ぎてとまどったようで、調べたいテーマとは直接関連がない新聞記事も集めていた。

そこで、「新聞の見出しや冒頭の2～3行に注目してみよう。」と声をかけると、見出しや冒頭の部分を読みながら、必要だと思われる新聞記事だけを選定することができた。

次に、特に必要だと思われる新聞記事を切り抜き、ワークシートに貼り、文章で要約を記入し、自分の意見や感想、疑問点を記載した(図2)。

最初、Aは要約の欄に、新聞記事の文章を全部写して記入していたので、「要約するとは、大事なところだけを記入することだよ。この記事の大事な部分は、どこかな？」と声かけをした。すると、Aは新聞記事の冒頭の部分にニュースの概要が記載されていることに気づき、マーカーで線を引きながら数字や言葉に着目するようになった。新聞記事の写真もよく見て、疑問や感想を話しながら、ワークシートに記入していった。

その結果、「これまでの日本は電力の安定供給や発電にかかるコストが理由で、火力発電や水力発電、原子力発電に依存してきた。けれど、原子力発電の問題が大きいから、これからは他の国を参考にして、節電に気をつけて、違うエネルギーの方法も考えなくてはいけない。」と、調べたことに基づいて自らの意見を述べる事ができた。

学年 名前	
新聞記事の見出し	
①この新聞記事を取り上げた理由 ②新聞記事の要約 ③内容に対する疑問、自分の意見、感想を書く	新聞記事を切り抜いて貼る

図2 新聞を使ったワークシートの書式例

「節電に気をつけるとは、具体的にはどのようなこと？」と質問すると、教室を見渡して「必要がないときには、電化製品のコンセントを抜く。」「冷房の設定温度を高めにする。」と発言した。新聞記事に記載されていた計画停電に関する複数の意見を読んだ上で、「停電は大変だけど、逆にこれまでの生活を見直す機会にもなるのではないか。」という見解に至った。

単元が終了した後も、被災地から転入した友達のことを気遣いながら、福島県の原子力発電所に関する新聞記事を読み、「(被災地から転入した) Bさんは、いつ元に戻れるのかな。」と心配する様子がみられた。

Aの在籍期間は連日、原子力発電に関するニュースがテレビや新聞で報道されており、身近に転入した友達がいいたこともあって、自分が設定したテーマに対して関心を持って学習に取り組むことができた。収集した資料は少なかったが、調べたいテーマに沿って必要な情報を取

集ることができた。また、自分の思いを伝えるだけではなく、資料（新聞など）から読み取った客観的な事実を基にして、考えたことを分かりやすく説明することができた。目標の②、③は概ね達成できたと考えられる。

また授業全体を通して、Aが意欲的にテーマを追究することができた様子から、新聞を教材として活用した成果は確かにみられたと考えられる。

今後は、現在、注目が集まっている自然エネルギー利用の可能性など、Aが前籍校に戻ってからもさらにテーマを継続して追究していくことを期待している。

(4) 考察

新学習指導要領の中学校社会科の公民的分野では、従来にはなかった「社会をとらえる概念的な枠組を形成するため」に、「対立と合意、効率と公正などの基本的な概念・考え方」を取り上げて、現代社会をとらえる見方や考え方の基礎を養うように明記された。

多様な考え方や価値観、利害の違いがある現代社会において、意見の相違や紛争が生じて「対立」があった場合、互いが共に成り立つことができるように何らかの「合意」が図られなくてはならない。また、「合意」の妥当性の判断基準となるのが「効率」や「公正」の考え方である。この点、新聞はあらゆる社会的な事象について、多種多様な意見がタイムリーに各紙の視点で取り上げられており、「対立」「合意」という概念、「効率」や「公正」という考え方を学ぶには適した教材であると考えられる。

今回の単元でAが調べたテーマについても、企業と被災者、政府という三者の立場の主張を読み比べることで、前述した概念を考える契機になったのではないかと考えられる。

また社会科の中における言語力の育成・活用の重視として、「地図や資料の読み取り、解釈、論述、意見交換などの学習活動の重視」が示された。このうち「意見交換」については、当校施設併設学級だけではなく、どこかの特別支援学校（肢体不自由）においても、通常学校と比較して少人数であり、授業の中では活動が成立しにくい点がある。それに対して、複眼的な視点を持つ新聞を資料として取り入れて、読み比べをすることにより、1つのテーマについても異なる見方や考え方があるということに気づけるため、少人数での意見交換をカバーすることにもつながるのではないかと考えられる。

IV. まとめ

特別支援学校（肢体不自由）での実践事例に限られる中、これまでの3年間は通常学校での実践研究などを参考にしながら、試行錯誤してNIEに取り組んできた。

Ⅱで挙げた「新聞に慣れ親しむ環境設定」の成果としては、これまでに挙げた事例以外にも、休み時間に児童

生徒が新聞記事のことを話題にしたり、新聞を読む児童生徒の様子について担任の先生が報告をしてくれたりするなどの様子が見られた。引き続き、療育センターと学校双方で新聞に慣れ親しむための環境設定、ならびに療育センターとの連携について取り組んでいきたい。

Ⅲで述べた社会科の授業については、必要な電力の確保という課題設定に対して新聞を教材として活用することで、情報収集や選択をしながら、自分の意見や疑問点をまとめるという学習過程の中で、Aが興味・関心を持ちながら意欲的に追究する姿を引き出すことができた。

今後も生徒の実態と単元の目標に照らし合わせながら新聞をを活用し、さらに「社会的な思考・判断・表現」「資料活用の技能」という評価の観点に基づきながら、新聞の有効性について具体的な検証を進めていきたい。

当校のような施設併設型の特別支援学校（肢体不自由）では、障害や年齢、在籍期間が幅広く、学級編成や教育課程が様々であるために、各学級や個人の特性に応じた配慮や工夫が必要である。だからこそ、教科の中で行うNIEだけではなく、これまで述べたような隣接する他機関（当校の場合には療育センター）と連携したNIEや、異学年同士の交流や学び合いとしてNIEを活用する方法など、通常学校とはまた違った多様な学習の展開ができるのではないかと考えられる。

次年度以降も、特別支援学校ならではのNIEのあり方と具体的な方法について、検証を重ねながら取り組みを続けていきたい。

参考文献

- 安藤隆男（2009）新学習指導要領と肢体不自由教育，肢体不自由教育，190号，2-3
- 加藤隆芳（2010）障害者が記事の内容をわかりやすく述べるための取り組み，日本NIE学会誌，第5号，59-68
- 国立教育政策研究所（2002）生涯学習社会におけるメディア・リテラシーに関する総合研究
- 文部科学省（2008）小学校学習指導要領
- 文部科学省（2008）中学校学習指導要領
- 文部科学省（2008）中学校学習指導要領解説 社会編
- 文部科学省（2009）特別支援学校小学部・中学部学習指導要領
- 下山直人（2009）特別支援学校学習指導要領などの改訂について，肢体不自由教育，190号，4-13
- 高田喜久司（2006）NIEで育てたい力－学習指導論の立場から－，日本NIE学会誌創刊号，99-102
- 田中孝一（2007）教育課程の改善とNIE，日本NIE学会誌第2号，105-107
- 徳田侑子（2006）「意思決定力」を育成するNIE授業の構想－社会科授業におけるNIE－，日本NIE学会誌創刊号，17-26
- 東京都NIE推進委員会（1990）NIE－教育に新聞を－

東京都 NIE 推進委員会研究報告書

東京都北区立王子第三小学校 (2009) 「情報を正しく活用できる児童の育成 - NIE の実践を通して -」, 北区教育委員会研究協力校研究発表報告書

横浜国立大学教育人間科学部附属横浜中学校 (2008) 習得・活用・探究の授業をつくる, 三省堂